

平成29年4月29日(土)

秋田県生涯学習センター:講堂

平成29年度「あきたスマートカレッジ」開講記念講演

内から見た秋田・外から見た秋田

元秋田県副知事・前消費者庁長官 板東久美子



皆さま、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました板東久美子でございます。本日はお天気の悪い中、たくさんの皆さまにお集まりいただきありがとうございます。実は私は昨年のおも秋田に参りました。秋田南高校が開校50周年で中等部を開設し、その記念式典の講演にお招きいただきました。その時も、今日のように雨がじゃあじゃあ降りでしたので、「私はちょっと雨女ではないかな、この開講式の日には申し訳ないな」と思っております。ですが今日はたくさんの方にお会いでき、光栄に存じます。たぶん、私が秋田におりました頃にお会いした方々もいらっしゃるのではないかと思います。懐かしい気持ちを込めて、今日はこの場に立たせていただきたいと思っております。

副知事時代においてお世話になりました頃から既に17年近く経つのですが、実は秋田にはよく来ております。大体、年に少ない時でも2回、普通で4回くらいは秋田に来ております。もはや第二の故郷のような感じです。ご存じない方もおられるかも知れませんが、簡単に私が秋田に行かせていただいた経緯を、自己紹介を兼ねて述べさせていただきます。

私は平成10年から2年3か月、秋田で副知事の仕事をさせていただきました。それ以前は、ほとんど秋田との御縁はございませんでした。文部省に入りましてから3年ほど経った頃、地方行政に関係する課にいたのですが、その時に雑誌を編集しておりまして、生涯学習や文化行政を取り上げた時に、秋田県に原稿を依頼しました。文化ゾーンや生涯教育などの取組でたいへん秋田県は進んでいるとお聞きしましたので、原稿をお願いしました。そのような経緯がありまして、生涯学習センターでお話しさせていただき今日はとても感慨深い思いがございます。

その後、2回ほど出張した以外、仕事上で秋田との関わりはありませんでした。寺田知事の県政がスタートした頃、1年間にわたり、副知事と出納長が決まらない、議会で認められない状況が続いていました。そうした中で、知事が、秋田ではまだまだ女性のリーダーが少ないので、「女性を起用してみよう」「県外から違う視点の人を連れてこよう」というお考えで、文部省にお話があったということでした。しかし、その時は、私の子どもが中学生と高校生で、特に下の子が中1で危なっかしい時期でしたので、「秋田に行っても大丈夫かな」と悩ましい時期でもありました。正直言って母親としては、たいへん悩みました。しかし、秋田のことを調べるにつれ、徐々に考え方が変

わってきました。当時の秋田県はいろいろな県政上の課題が山積していました。何よりも人口減少が始まり、しかも少子高齢化のスピードがたいへん速いということを見て、こういった秋田が抱えている課題の解決になんらかのお役に立てるのであれば、ぜひ行くべきではないかと思いい、副知事の任に就かせていただいた訳であります。

秋田県副知事を離任する時、県庁の多くの有志の方々がお別れパーティーを開いていただき、お饞別をとということで目録をいただきました。開けてみますと「秋田の米と酒1年分」と書かれています。すると、お米と県内のいろいろな蔵元のもとも美味しいお酒が送られてきました。本当にとびっきり美味しいお米とお酒をたいへん楽しませていただきました。おかげで胃袋の方はいつまでも秋田に居る気分です。そういう御縁もございまして、私は秋田から帰って既に17年になりますが、お米は秋田県産あきたこまち以外はほとんど買ったことが無いし、お酒も秋田のものをまず選ぶという状況です。

それから、秋田にいた時、秋田内陸リゾート・カップの100kmマラソンに参加させていただきました。実は秋田にいた頃、お酒を飲む機会があまりにも多かった上に、副知事として公用車で移動することが日常的でしたので、「これはいけない、生活習慣病まっしぐらではないか」と思い、何か体に良いことをしなければと考えていた折、ちょうど副知事就任1年目の秋に100kmマラソンの開会式でご挨拶をする機会がありました。その時、私が東京でたまたま知っていた方も走りに来ていたこともわかりました。その方は、47歳の時、最初に2kmほどの短い距離から走り始め、半年後にフルマラソンを走れるようになり、さらにその1年後に秋田の100kmマラソンに出場されました。その方が、私に向かって「あなたなら半年ぐらい少し練習すれば、100kmは無理でも50kmは走れるようになる」という話をされ、「じゃあ、私も100kmマラソンの50kmの部に出場することを目指して走り始めよう」と副知事就任2年目の4月に決意しました。そして、夜に帰りますとすぐにジャージに着替えて、夜陰^{やいん}に乗じてその辺りを走り始めるようになったのです。そして、半年後に50kmマラソンに出場し、なんとか完走できました。その時は、たいへん達成感を感じました。胸がじーンと熱くなり非常に嬉しく思いました。その他にも二ツ井などで開催された大会に参加させていただきました。

それで満足したつもりだったのですけれども、東京に帰ってからもマラソンを続けました。東京に帰ってからは、ハーフマラソン・フルマラソンなどいろいろな大会に参加しながら、これを趣味にしていました。「それ以上長い距離はなかなか」とは思っていたのですが、秋田の100kmマラソンの実行委員会から毎年応募用紙が送られてきました。東京に帰った1年目はパスしたのですが、2年目の時に「私もだんだん年をとるので、100kmに挑戦できるのもう最後かも知れない」と思うようになりました。途中で棄権してもよいから1回これを走ってみたいと思い、意を決して100kmマラソンに申し込みまして、事前に少し練習をして臨みましたらなんとか最後のゴールまで行き着きました。

「もうこれで大満足」と思いおしまいにするつもりでおりましたら、次の年も応募用紙が送られてきました。締め切り日が過ぎても申し込まないでいましたら、実行委員会の方から「板東さんから今年の申込書が届いていないんですが」と電話が掛かってきました。それで、私は「泊まる場所さえ有れば」と答えたところ、有るとのことでしたので「それじゃあ行きます」と言ってしまいました。そのような事情で翌年も100kmマラソンに参加しました。結局その後もずっと続けて出場しておりました。100kmの部には6回も出ましたでしょうか。

なぜ、そんなに何回もマラソンに参加したかという、もちろん実行委員会の方々から請われた

こともありますが、秋田の魅力満載の大会なのですね。100kmは歩くだけでも苦しいのですけれども、まず本当に秋田の素晴らしい自然を、体でずっと感じるすることができます。

山とか田んぼとか、そうした特別なものではない普通の自然環境が美しい。それこそ9月ですから黄金色になっている田んぼの稲穂など本当に美しい風景に出会えます。さらに、そういう自然ばかりではなくて、やはり「人」の魅力が大きいと思いました。全国各地の100kmマラソンやフルマラソンを走った強者達が「地元みんなを挙げて応援してくれる」「ボランティアの方が温かく迎えてくれる」「ゴールしてからは、きりたんぼ鍋やおでんなど美味しい物をたくさんいただける」など、こんな大会は他には無いと言われました。本当に私自身も他のマラソン大会に参加するたびに、このことを思います。ご承知のように100kmマラソンは内陸線沿線の人口の少ない地域を走ります。市町村合併前の昔で言えば、8町村を通過するコースです。そんなに人口が多いわけではないのですが、支えてくれるボランティアだけでも3000人の方々が協力に出てくださいます。それだけではなくて、ずっと遠くの沿道から地元の皆さんがほとんど切れ目の無い形で応援の声をかけてくださいます。まさに町や村の運動会のような雰囲気、道端にご飯を敷いてお弁当を持って、日がな一日応援して下さる楽しい大会です。ハイタッチなどしながら、ランナーと応援の地元の人達が交流していくわけですが、そんな風にランナーの皆さんを温かく励ましてくれる「人」の魅力が、大会リピーターが多い理由の一つではないかと思えます。私などは秋田県副知事を務めさせていただいたので、知っている方もたくさんいらっしゃいます。私が走ってくると「板東さん」と声を掛けてくださるのですが、私ばかりでなく知らない方々も含めて参加者を応援して下さり、みんなで力を合わせ地域の中で支え合う温かい大会がとても魅力的でした。

また、みなさんが普段食べられている物も、県外から来られる方々にはとても珍しい物なのです。例えば、5kmごとに水分や食べ物を補給できるようエイドステーションが置かれており、その中には、地域のさまざまな果物や産物なども出していただいたりします。山菜料理のミズのこぶなどが置いてございまして、県外から来られたランナーはみんな「美味しいけれども、これは何だろうか？」という感じで楽しんでいかれます。秋田では当たり前の日常的な物でも、外から来られた方にとってはたいへん珍しく、また楽しめる物がたくさんあり、それが魅力になっています。そのようなことを、私自身も本当にいっぱい体験しています。また、マラソンを一緒に走った方々とも、秋田への感謝を共有させていただきました。

このようなことを含めて「秋田って宝がいっぱいあるんだよ」ということを意識していただきたいと思えます。内にいる方々、つまり秋田に居住しておられる方々には、日常的な食べ物や風景が、外から来た人にとっては初めての経験、初めての味であったり、なかなか得がたいものであったりするわけです。ぜひいろいろな宝をもっと自覚して積極的にアピールをし、また生かしていったら、秋田はもっと違う地域になっていくと思います。一方で外から入って来る方々には、内に居る方々には当たり前の知識が無いところもあって不便に思うこともたくさんあります。例えば秋田の場合は飛行場や新幹線の駅までは、割合と東京から便利に行けるのですが、そこから先のアクセスがなかなか大変で、観光地まで簡単に行けません。実際、駅に降りても、そこにバスが無い、タクシーがない。そのような駅もたくさんあるわけです。より秋田らしい、いろいろな魅力のある場所へ行こうと思っても、どうやってアクセスしたら良いのかわかりません。外からの目でもう少し「どうやったら秋田の魅力を味わっていただけるか」ということを考えてみたら違うのではないかな、と感じたわけで

あります。今申し上げたように秋田はいろいろな強みや宝を持っていると思うのですが、しかし県民の方々は「いやあ、何も良い物は無いですよ」とおっしゃる方も結構おられます。県民自身ももっと秋田の魅力を自覚するべきで、それを生かすための努力も含めて、様々な方策を考えていくべきではないかと申し上げておきたいと思います。

いろいろな宝を持っている一方で、秋田は「課題先進県」のフロンティアであり、少子高齢化と人口減少に関しては全国一のスピードで進んでいます。日本全体も同じなのですが、特に秋田は変化のスピードが最も速い状況です。やはり、一番の課題は、その辺りにあるのではないかと思います。東京大学総長を務められた小宮山先生が、「日本は課題先進国だ。課題を克服するためにいろいろ培ったことが、むしろ世界に対する貢献になったり、新しい産業を生み出したりする。課題を乗り越えるチャレンジが新しいものを生み出していくのではないかと」とよく言われています。秋田は「課題先進国」の中でも最前線にある県です。この秋田の課題の解決に向けての様々な取組から生まれてくる新しい産業は、これからの日本あるいは世界に向けて大きな可能性を切り拓くものではないかと思っています。そういう意味で、様々な挑戦が必要ですが、これは逆にチャンスにもなるのではないかなと考えています。そのためにも、秋田の可能性を生かし、いろいろな課題を克服して、これからも魅力ある地域として活力ある進展を図るには何が必要かということ、皆さまと一緒に考える機会にさせていただければ幸いです。

何度も申し上げましたが、秋田にはたくさんの宝があります。その中でも一番の強みは、先程も話しましたとおり「人」だと私は思っております。他にもいろいろ良いものはたくさんありますが、人の質・能力の高さ・人間性の良さの魅力は本当に大いに誇りにさせていただいても良いと思います。後で教育のお話も申し上げますが、いわゆる学力云々だけではなく、「秋田の方は地に足が付いた実力派」ということを私は時々申し上げます。単に知識とか頭でっかちではなく、本当に自然と共に生き、様々な活動をしながら手足もきちんと動く、総合的な実力を持った方々だと強く感じます。人間としての温かさを持つ人間性豊かな方々だと思います。秋田を紹介する冊子を見ましたら「秋田の人は、人の好きは日本一ではないか」と書かれていました。人間性の良さということが、いわゆる「人の好き」という表現になったのではないかと思います。秋田県人は人間の魅力ということでは一番だと思っています。しかも、秋田の場合はリーダーよりむしろ、まさに普通の県民の方々一人ひとりが力を持っているという強みがあると感じます。さらには、秋田の人が生み出す様々な技や文化が豊富にあります。



そして、秋田には美しい自然があります。秋田の自然というのは一つのものが特別目を引くわけではないのですが、当たり前な日常的な自然の風景全体が美しい、身近にある自然自体がとても素晴らしいと感じます。鳥海山など美しい山もあります。私は長野県松本市に住んでいたことがありますが、あそこの山みたいな峻巖とした感じではないですね。生活と自然との関わりの中で、優しい感情を呼び起こしてくれるような自然。厳しい冬もあるけれども、それを乗り越えていく醍醐味を

感じさせてくれるような身近に一緒にある自然が魅力的です。

それから、秋田の食文化、これは外の人から見れば本当に驚きと感激に満ちたものだと思います。私は4月に副知事として赴任したのですが、その頃、秋田は山菜採りのシーズンでした。さきほど、100kmマラソンの話題でも出しましたが、いろいろな種類の山菜を味わわせていただきました。それまで無かった食体験でした。秋にもキノコなど豊かな山の食材があるわけですし、非常に恵まれています。また、海の魚介類では岩ガキ。あのような美味しいものを知れば、遠くからでも食べに来る人がいるのではないかと思います。また、秋田のお米、もちろん東京で食べても美味しいのですが、とれたてのお米を食べられることはとても幸せでしたね。秋田のお酒は東京でも出るようになりましたけれども、本当に美味しいものですね。私が副知事時代、秋田でしか飲めなかった美味しいお酒もずいぶんありました。そのように、いろいろな人たちが「わざわざ秋田に足を運ぶことも良いな」と思わせるような物産も含めて、秋田の食文化というものは非常に豊かだと思います。

そして、秋田では「人と人とのつながり」ということが非常に大事にされております。秋田は地域社会のつながりがまだ相当機能している所なので、そのようなことを強く感じました。数か月前、NHKのテレビ番組で秋田県を取り上げていて、出演のさだまさしさんが「秋田の人って、秋田がすごく好きなんですよねえ」と話されていたことが印象的でした。東京でも秋田県人会や秋田ゆかりの人たちの会がよく開催されます。その際には元副知事の私も招待されまして、楽しませていただいております。本当に集まられた皆さんは、秋田のことを想ってすごく盛り上がられます。秋田を離れた方々もそれだけつながりを強く意識されておりますが、本当に地域の中で人と人が助け合う関係でつながっている状況は、教育など子どもたちが育つ環境においても非常に良く機能していると思います。全国トップクラスの教育の背景でもあると思います。これについても、後でお話いたします。

いま申し上げましたように、秋田は普通の人びとの日常的な暮らしの中、つまり身近なことの中に美しさがあり、とても魅力があると思います。ちょうど秋田にお世話になっておりました頃、県が総合発展計画を策定した際、「時と豊かに暮らす秋田」という副題を付けました。私は、これがまさに秋田の強み、魅力を表す言葉だと感じたわけであります。ところが17年前の県内には、いろいろな問題が山積している状況下で、「時と豊かに暮らす」ではあまりにもノンビリしており「副題としては、いかがなものか？」との意見もありました。しかし、今、我が国が成熟社会を迎えていく中で、豊かに暮らすことはますます価値を持つてくると思われれます。最近、働き方改革として言われている新しい取組は、仕事の活力と日々の暮らしを大事にすることがシンクロしています。17年前の総合発展計画の副題「時と豊かに暮らす」の趣旨は、現在、まさに時代の潮流に合致するようになってきたと思われれます。これから、観光分野などにおいてもますます価値を持つてでしょうし、秋田への移住人口や交流人口の増加などを目指す上でも豊かに暮らすことは、非常に大きな魅力になっていくのではないかと思います。

また、私は秋田県内各地で受け継がれている祭りを非常に魅力的に感じています。このような講演の場では必ず触れさせていただくのですが、実は秋田県は国指定重要無形民俗文化財の登録数が全国トップなのです。形ある物、つまりハード面の宝である有形の文化財がたくさんあるわけではないのですが、人により行なわれる伝統行事などソフト面を見ますと、重要無形民俗文化財に指定された祭りが日本一多いわけなのです。また非常にバラエティに富んでいます。たとえば

小正月行事などを見ましても、横手のかまくらのような静かなものから、六郷の竹打ちや刈和野の大綱引きのようなエネルギッシュなものまで地域によってまったく違う種類のものがたくさんあります。夏のお祭りも、本当にバラエティに富んでいます。これらは地域の誇りであり、地域の活力を作っていきます。観光や交流人口拡大の面から考えても、大きな秋田の魅力だと思います。ただ、今までは「秋田の祭り」と言えば竿燈は大きく取り上げられるのですが、それ以外はあまりアピールされていないなど残念な面がありました。夏のお祭りなどは、土崎湊祭りなどいろいろなものがあるのですが、各祭りの時期が少しずつずれていますので、少し長めの旅を組もうと思っている方にとってはいくつも観光することができる利点があります。いろいろな祭りをうまくアピールし、活用することによって、竿燈以外の祭りも見ることができ、毎年違う祭りを楽しむために秋田へのリピーターが増えると思います。「いくつかの祭りの観光を組み合わせると1週間楽しんで帰ろう」ということもできるわけです。いくつかのものを組み合わせることで、すなわち相乗効果を生むような企画については、これまであまり取り上げられてきませんでした。小正月行事などもいくつか組み合わせれば、1週間くらいの観光旅行でいろいろなことを楽しめます。ですから、祭りはいろいろな人たちに秋田を感じていただくための観光資源として、もっともっとアピールできるのではないかと思います。このような秋田のソフト面の魅力を断片的に扱わず、各個を結び付けて総合的にアピールしていただければ良いなと思いました。

また、秋田の誇りの一つですが、学力トップ水準はもちろん、生活に関わること、学習習慣に関わること、そのようなことを含めて秋田の子どもたちはとても健やかに育っています。私も副知事として秋田にお世話になったご縁があるので、東京でもいろいろな機会に「どうして秋田は学力トップなのですか」と聞かれます。必ずしも私自身が十分分析できているわけではないのですが、授業の仕方が非常に素晴らしいと思います。よく言われておりますが、各授業においてきちんと目標を明らかにして、1時間の中で達成できたかを最後に振り返るわけですね。アクティブ・ラーニング、つまり自ら課題を見つけて学んでいく授業方法も、秋田ではしっかりと取り組まれています。これらが特別の学校だけではなく、全県的に進められるという教育風土がずいぶん前から培われております。このような教育を担う先生の熱心さ、また県による少人数学級の推進、そういった教育的条件が学力トップの背景にあるのではないかと思います。ただし、そのようなことばかりでなく、家庭や地域がしっかり機能していることも背景になっていると思います。それらの総合力として学力トップの成果が生まれたのだと思います。ですから、急に試験対策をしたなど付け焼刃的な学力ではなく、長い間掛かって総合的に培われてきた本当の意味の実力だと思っています。

このような学力トップを生む子育て環境がある秋田には非常な強みがあり、それが今よりもいろいろなところに生かされればさらに良い成果を生み出すと思います。今、「強み」と申し上げましたが、それならば、なぜ少子高齢化とか人口減少とかが日本で一番進んでいるのかという疑問について考えていかなければならないと思います。少子高齢化と人口減少は日本全体の問題でもあるわけですが、その中でもなぜ秋田が進んでいるのか、ぜひ会場の皆さまもお一人おひとりこの機会に考えていただけたらと思います。

秋田県の総人口は、私が副知事の頃で120万人でした。それが毎年1万人ずつ減少していき、現在では100万人割れという状況になってまいりました。1万人ずつと言うと、一つの町や村が毎年消えていくようなスピードです。この事態はたいへん大きなことです。2040年の秋田県人口は70万人になるだろうと言われています。これは過疎化地域自体のあり方の問題、それから産業の問題もあり、結果としては様々な問題が複合しております。人口構成を見ますと、2017



年から2040年に向けて、15歳から64歳までのいわゆる生産労働人口が全体の半分を割るぐらいに減るだろうと予測されています。生産労働人口の減少は、全国平均と比較しますと、大体20年くらい秋田県が進んでいる状況です。もちろん、全国的に生産労働人口は年々減少している状況ですが。しかし、合計特殊出生率、これは女性一人当たりが一生の間に産む子どもの数ですが、全国平均1.422人に対し、秋田県は1.34人です。全国的には回復している状況ですが、秋田県は少し低い状況に留まっています。かつては秋田県の合計特殊出生率は全国平均よりもかなり上回っていたのですが、ある時点から逆転してしまいました。

私は副知事に就任した際、「なぜ人口減少や少子高齢化が進むのか」「何を改善しなければならぬのか」というたいへん重い課題を提起された思いがしました。これに関して、全国の少子高齢化の状況は、要因がいろいろ異なるということで、東京あたりで議論されているような子育て支援環境にもっと取り組むべきではないかということに対して、秋田の場合は力点の置き場所が違うのではないだろうかという副知事時代から思っておりました。子どもを育てる際にも保育所の問題がありますが、秋田の場合、それ以上に家計への経済的負担の問題があります。たとえば子どもに高等教育を受けさせることを考えますと、県外に出すとなると非常に大きな経費が掛かります。親はそれを考えると、あまり多く子どもを産み育てることができなくなります。そういった経済的負担の問題、特に高等教育費用の問題が県外の大学で学ぶことの多い秋田の場合、子育てに関しては大きな問題としてあります。

そして人口減少の原因となる一番大きな問題は、県外に出ていった方が地元に戻ってきて活躍できる職場が少ないことです。「県内に職場をどうやって創出するか」という産業分野の問題に関わっています。いまさら言うまでもないことですが、同じ少子化問題であっても、東京など都市圏における問題と秋田県における問題とでは、全く対策の力点の置き場所が違うわけです。既に皆さまご承知のように、現在、「地方創生」と言われている中でようやく地方での少子化の問題に焦点が当たってきたと言えましょう。

しかし働く場があれば、それだけで良いわけではありません。これからの社会においては多様な人達が活躍できる社会的土壌がますます必要になってきているのではないかと思います。例えば、秋田ではその辺りのことでもっと努力しなければならないのではないかと思います。一つの典

型的な例が、女性の管理職登用に関する問題です。私が副知事として秋田に来た時に、実は県庁の中で課長職以上の女性職員が他に誰もいませんでした。前年度までは教育庁に女性課長が1人いたのですが、私が赴任した4月には課長職以上の女性職員がいませんでした。私は秋田に赴任する前、女性を副知事に登用しようとする県なので、もうちょっと女性の登用が進んでいるのではないかなと期待していましたが、むしろ他の東北の県に比べても大きく差をつけられていました。赴任後、全国の都道府県の中での順位を調べてみましたが、課長職以上に女性職員が全く登用されていない県は他に無かったんですね。当時、青森県には女性部長がおり、また副知事も女性で、知事のかつての恩師でもありました。宮城県にも女性次長がいました。他の県にも女性で課長職以上の方がいましたので、改めて秋田県は女性の登用に関してこれから頑張らなければならないと思いました。私が当時言わせてもらったことは、「本当に素晴らしい力を持った女性の方々がたくさんいらっしゃる、そんな方達が社会で活躍できる触媒になりたい」ということでした。副知事時代にそれを十分に果たしたかと言うと、今でも内心じくじたるものがあります。

それから「ソト者」の重要性について、当時、秋田でご一緒に仕事をした方から教えていただいたことで、「ああ、そのような見方もあるのか」と感心したことがありました。当時、NHK秋田支局の局長をされていた方が、「秋田開国」ということをよく言われておりました。どういうことかという、NHKでは20年ごとに県民性調査を実施しているんですね。かなり網羅的な面白い調査をしているのですが、県民性を調査するにあたり、その県民の客観的な属性に関してもいろいろ分析しています。その県民性調査では、「親子三世代にわたって県内で暮らし、1年以上県外で暮らしたことの無い人」を「生粋県人」と定義しています。その生粋県人の占める割合を見ますと、秋田県は沖縄県に次いで全国で2位の高さであるということでした。秋田県の外にほとんど行かない人の割合が東北の他の県に比べてもかなり高いということでした。それで、秋田に対する非常に強い想いを持った方々がたくさんおられるのだなと思いました。反面、秋田を外から見る経験が乏しいという状況もあるのかなと思いました。いわば、秋田県の外に出て行く方は多いのですが、外から入ってくる方はまだ少ない状況が当時もありました。このような外との交流の問題は、今、いろいろな意味で「交流人口」とも言われておりますが、さきほどから強調しているとおりに、秋田の強みを生かしていくためにも、また地域産業の活性化を図るためにも、この県外との関係を「ソト者」の力も含めて生かしていくことがますます必要になってくるのではないかと思います。この面が秋田はちょっと弱いのではないかと、つまり外から見ると秋田は「入りにくい」地域ということになるわけです。外の力を積極的に取り入れていこうというエネルギーがまだ十分ではないのではないかと思います。

それから「若者」についてですが、副知事時代にある町で「老人会に青年部ができた」と言われて、びっくりしました。組織の上が重すぎるので、本当にいろいろな活動をしようという方々が、



たとえば60代というような若い方のシニアで集まって「少しアクティブにやろうよ」ということで青年部を立ち上げたいです。高齢者もひとくくりにはできません。やはり、多様な年代層の人達がよりそれにふさわしい力を発揮できるような機会が、ますます必要になってきていると思います。これからは、先輩達が「とにかく若者、やってみろ」ということで若い人達を後ろから押し出していいただいて、今までと違う役割で積極的に活躍していただくことも必要になってくると思います。

また、少子高齢化と言われていますが、実は秋田は平均寿命で見るとそんなに長い方ではないのです。健康長寿社会ということをもっと目指しても良いのではないかともあります。ちょっとお酒を飲む量を減らせば、かなり長寿度が違って来るのかも知れませんが。私は長野県にも住んだことがあるのですが、長野はかつて短命県と言われていました。とにかく塩辛いものが好きである、お漬物が大好きであるということだったのですが、保健師さん達が頑張りまして減塩活動を行いました。また、現在、長野県は全国でも一番野菜を食べる県であり、一番少ない県と比較すると2倍以上は野菜を摂取しています。高原野菜などたいへん多く収穫される所で、産業とも結び付いていると思うのですが、食生活自体をずいぶん改善していったのではないかと思います。

それから、「元気でピンピンコロリを目指して」と言われていますが、長野は在宅医療の仕組みが良く整っています。また高齢になっても働いている方が多く、本当に生涯現役で働く率が高い所です。農業が盛んなので高齢になっても働けるのです。長野県はいまや全国平均で一番の長寿県で、在宅医療の制度整備もふくめて非常に積極的に長寿社会に対応しているわけです。秋田県もぜひ健康長寿社会づくりの面でも、良い例として先頭になり取り組んでいって欲しいと思います。

それから、秋田県の課題として定住人口を増やすことがあり、AターンとかIターンとか言われていますが、「必ずしもずっと県内に住み続けることを考えなくても良いのではないかと私は思っています。定住する人だけを考えていても、なかなか人口は増えていかないと思います。たとえば、いままで雪を経験したことのない人たちには雪国秋田の冬の暮らしはなかなか厳しいかも知れません。しかし、季節を選んでやって来る交流人口などを新しい形での秋田の住人と考えてみてはいかがでしょうか。このように柔軟に考えることは、もっとあるのではないかと思います。高等教育機関というのも、そのような意味ではとても重要であると思います。県外出身の学生であっても、秋田で大学生として何年間か生活することで地域とのつながりができ、それがやがては秋田に再びやって来るという交流人口になります。それが人口減少の歯止めに大きく寄与していくのではないかと思います。



これらのことをデータから考えてみたいと思います。秋田の場合、人口はまず大学進学時に減っています。「収容力」つまり高等教育機関がどれくらい学生を収容できるかを18歳人口当たりで見ると、私の副知事時代、秋田県は全国で下から2番目か3番目くらいでした。その頃から見ると現在は少し状況が改善されました。しかし、全国的には、まだまだ収容力が少ない方

の県になっております。ですから、進学の際に人口流出している先がやはり東京近辺や関東方面が多いわけですが、秋田県はそのために人口がマイナス傾向にあります。しかし、私は学ぶために外に出ること自体はそんなに気にしなくても良いことではないかと正直思っております。

さきほどお話ししましたように、秋田の場合は生粋県民率が高いわけであります。前にお話の中に出てきたNHK秋田支局の局長さんが、若い人を外へ出すことを積極的に考えた方が良いのではないかと言われていました。もちろん進学での形でなくても良いのですが、「異なるもの」と出会ういろいろな経験を意識的に積む必要があるのではないかと、あるいは外から積極的に人を受け入れていくべきでないかという意味で、「秋田開国」と言われていたわけです。ただ、大学時代にいったん県外に出てしまうと、なかなか秋田には帰ってこないケースが多く、その分の人口がマイナスになっています。逆に東京近辺と愛知県及び大阪府、このあたりの地域が20歳から24歳の年齢層で人口プラスですね。これより上の25歳以上になると、人口の変動はほとんど均衡化してくるわけですね。この大学進学時と就職時というのは人口変動が大きい時期になります。しかし、さきほど申し上げましたとおり、一度外に行くこと自体は必ずしも悪い面ばかりでなく、若者が外でいろいろな経験を積んで帰って来るわけです。そういったことも含めて、いろいろな移動ということは有って良いと思いますが、プラスマイナスで23～24歳でがくりと人口が減ることをどう改善するかということが一つの大きな鍵になると思います。

これは明らかに働く場の問題であり、受け皿の問題です。産業力の問題になってきますが、この産業に関しては、日本全体で見て世界のGDPに占める割合は減ってきています。この点に関して、中国は増えてきています。ヨーロッパの国々と比べても日本GDP減少率は大きく、今、成長戦略として国全体の力をもっと高める必要があると言われていています。全体のパイ、すなわち市場の規模が国内で小さくなってきたため、海外からも稼ぐということ、また現在ある産業において生産性を高めていくことも必要になってきます。日本は労働生産性が低いと言われていますが、やはり相対的に見ると地方における生産性がまだまだ低いレベルにあり、その中で秋田県の位置は全国35位です。労働生産性の数字は必ずしも実際の産業の強さを表しているわけではありませんが、数字上の位置付けの底にある様々な問題も意識はしなければならぬだろうと思います。

それから、様々な産業が構造変化しています。やはり情報通信やサービス業へのシフトが確実に進んできていること、そしてご承知のように人工知能やロボット、IoTなど大きく情報技術などを活用した形の転換が生まれています。10年～20年後に日本にある仕事全体の半分くらいは人工知能やロボットで代替できると言われています。

それから、日本の市場自体が小さくなってきたこともあり、海外での生産や販売が増加しています。今、国際情勢の中でいろいろな不安要因もありますが、海外での市場展開も見過ごされない課題です。また、海外と言っても相手国も様々変化してきております。アジアのウェイトも輸出輸入ともに大きくなっている状況です。

今申し上げたように、産業自体も大きくいろいろな構造変化をしています。それをうまく自分の地域の産業の力に取り入れていくことができるし、その努力をしていかなければならないと思います。ですから、今まで強みであった分野が、必ずしもこれからもずっと強みであり続けるわけでないということを考えなければなりません。そういった変化ということ、プラスの方向に使っていけるかということが大事です。例えばIT産業であれば必ずしも東京でなくても、地方でも仕事はできる状況があ

るわけです。そういった変化をどのようにうまく使って地方で産業を強くすることができるか、プラスの方向に活用していった欲しいと思います。

国際化の関係でも、外に出て行くだけでなく、中に入ってくる人、いわゆる「インバウンド」と呼ばれる人達をご承知のように急速に増えています。2016年には、外国人観光客はもう2000万人を越えております。ところが、秋田の場合、観光面でまだインバウンドの人達が非常に少ない状況です。さきほど紹介しました秋田の祭りは、外国人にとって大きな魅力だと思われれます。今、日本人だけではなく外国人の観光客も傾向としては「モノ」から「コト」へという流れが明らかに見られます。いろいろな体験に対して、もちろん生活の体験も含めまして、外国人の方が魅力を感じている傾向が強まっています。観光については秋田の場合、アクセスの問題が改善されていない面もありますが、まだまだ大きな可能性を生かし切れていないと感じております。産業の変化に対しては、いままでの強みをそのまま生かせないという課題もありますが、逆に高度情報化により、地理的なハンディキャップなど、いままで弱みだと思っていたことを簡単に乗り越えることができるような変化も生まれてきています。それをぜひ、新たな強みにしていかなければなりません。

それから、秋田の場合には「課題先進県」と申しましたが、むしろ医療や福祉などで先進的な取り組みを行えば、健康長寿社会に向けて全国に先駆けて産業的にも福祉的にも発展できる可能性があるのではないかと思います。ようやく最近、そのような動きが見えてきました。産学連携などの部門で、「もっと早く手を付けても良かったのでは」という感じもいたします。

これからの人口減少を考えた場合、あるいは人口減少の原因にも関わりますが、「女性をどう活躍させることができるか」ということが、とても大きな課題だと思います。その点で、最近やはり地方創生や女性の活躍ということが、子育て環境の問題ともからんで大きくクローズアップされています。日本全体としても、女性の就業人口割合を見ますと諸外国と日本ではそんなに大きな差が無いのに対して、女性の管理職比率になると格差が大きい現状です。秋田の女性管理職比率について、さきほど20年ほど前の様子を紹介しましたが、現在でも全国44位という低さです。この女性管理職比率の低さは、官公庁ばかりでなく企業にも共通しています。秋田県は東北地方の中でも低い方です。女性の就業率をどうやって上昇させるかは、リーダーとしても活躍していただくという、いわば「量」だけではなく「質」としての課題ではないかと思います。逆にさきほど申し上げたように、女性が活躍できる状況を作っていけないと、「秋田で働こう」という女性の数も増えないことになりかねません。そのような好循環を作っていく必要があるのではないかと思います。それから、雇用されているというだけではなく、秋田の場合には実は女性が起業で大分頑張っておられます。特に農業関係の起業での女性の活躍が多く、この分野だけを見ても全国でトップクラスです。たとえば農産物直売所で、加工分野、物産分野などで女性の起業者が多く見られます。秋田の男性起業者は全国平均をちょっと下回っておりますが、女性の場合は高い方のグループに入っています。ですから新しい世の中に合わせて、新しいことにチャレンジし、新しい事業を創っていく力が秋田の女性には十分にあるし、現に形になっているのではないかと思います。このような女性の起業も、今後期待できると思います。維持だけではなく、将来は新しい時代に合った産業が生まれてくるのが大切だと思います。

それから、日本の男性は女性が働いていても、なかなか家事や育児の分担ができていません。これは単に意識の問題だけではなく、子育て世代の男性は長時間労働を強いられていて家庭の

仕事ができないわけです。このようなことが、現在、問題になってきておりますが、ぜひ意識の問題も含めて男女で家庭を支え合う観点からも取り組んで欲しいと思います。

次に、健康長寿県を目指すべきということも、少しお話ししたいと思います。長寿化は国全体でも進んでおりまして、2050年には女性の平均寿命は90歳、男性は83歳ということで、もう人生90年あるいは100年が当たり前の時代になっています。私なども、もうこの年齢ではゴールも近いかなと思っていたのですが、ゴールがまだ先に延びる感じです。ところが、平均寿命だけが問題ではなく、よく言われていますように健康寿命ということがまさに問題になります。健康寿命と平均寿命では男性の場合は9歳、女性の場合は12歳の差があります。生活に何も支援が必要でない状態が続く年齢までが健康寿命です。それ以降、なんらかの支援が必要になってくる期間が男性で9年、女性で12年あるということです。この年月をいかに短くしていくか、つまり長く健康であり続けるかということが、地域の活力につながってくると思います。現在は「介護予防」などと言われておりますが、やはり高齢者がどんどん若返って元気になられています。かつては60歳くらいの方の体力が、今では70歳くらいの方に相当しています。このことは、歩行速度など体力テストの結果からも、年々上昇していることが実証されています。最近、学会が提起しているのですが、これまで「高齢者」を統計的に65歳以上と定義していたのですが、この概念は変えていくべきではないかと言わ



れています。私もそのように思います。「生涯現役」という言葉が出てきておりますが、人間が活躍できる年齢の上限は高くなってきているようです。実は、雇用者における高齢者の割合ですが、最近では65歳以上の方が65歳未満の方を上回っている状況です。最近、「一億総活躍」とか「生涯現役」とか言われております。雇用者だけを取り上げておりますが、それこそ農林水産業や商店で働いている人になりますと、もっと活躍の割合が大きくなります。なにも稼ぐことばかりでは

なくて、幅広い意味で地域の中の活動などの社会活動を、まさに皆さんもいろいろ実行されておられることだと思います。社会を支える様々な活動を見ますと、本当に生涯現役の時代が来ているのではないかと感じます。

また、海外と比較しますと、日本ではまだまだ大学などの社会人入学の率が低い状況です。その点でも、現役世代にもっと高等教育の門戸が開かれ、学ぶ機会が増えなければいけないのではないかと思います。私は21世紀はどのような力を育成すべきかについて、よく「自立」「協働」「創造」「グローバル×ローカル」「生涯成長・多面展開」の力であると申し上げております。最後のものは言葉として熟していないのですが、このような生涯学び、様々な役割を果たしていくことができる力もとても重要ではないかと思います。さきほど申し上げたように人生90年あるいは100年の時代になってきています。最初の学校教育で想定できるものは非常に基礎的なもので、その後、必要な知識は時代とともにどんどん変化していきます。最初の学校教育では想定できない事柄に、大人になってから対処しなければなりません。ですから、これから生涯を通して学習できる力、すなわ

ち生涯学習力が問われるわけです。労働に関連して女性の問題も申し上げましたが、社会、家庭、職業などで多面的な役割を果たしていくことがこれから生涯にわたってますます必要になってくると思います。そういう意味でも「多面展開」「生涯成長力」ということが重要だと思います。

さて、私も全国のいろいろな地域を訪問させていただきました。よく地方創生で取り上げられる島根県隠岐郡海士町の事例を紹介いたします。海士町は境港からフェリーで3時間くらい掛かる隠岐の島にあります。まさに、地理的条件ではまったく恵まれていない所ですが、今、若い人達が移住してきて少しずつ人口が増えてきています。さきほど、秋田の教育について話しましたが、高校の教育に力を入れることによって交流人口を増やしていく試みも行われています。海士町は、地域の魅力によって外から若い人達をスカウトしております。いままで海士町とは何も縁も関わりも無かった人達を移住させたり、いろいろな役職に就けたりしながら、うまくその力を使って地域に新しいものを創り出していくわけです。それで、さきほど申し上げました「ソト者の力をもっと使ったらどうか」ということが重要です。海士町役場の課長さんなどは、この事業をスタートするやり方がすごくうまいんですね。たとえば、何かいろいろな機会に町と関わりがあった若い人に、「海士町で仕事してみないか」と熱心にスカウトしまして、その方が現在は高校魅力化プロジェクトの責任者になっているわけです。そのような開かれた地域づくりが行われています。

私が消費者庁長官をやめる少し前、省庁移転問題を検討することになりました。徳島県において、消費者庁でテレワークによる業務の試行を行ったのですが、その時に同県の神山町でも試行をし、その町がたいへん良い地域づくりをしていることを知りました。さきほど少しITの話を書いたのですが、神山町は遠隔地に在っても支障なく仕事ができるような通信環境を整えて積極的に外から企業を誘致しています。それほど大きな企業が来ているわけではないのですが、デジタル・コンテンツを作るような企業などIT関係の企業や、またアーティストの人達にも住んでもらえるような環境を整えようとしています。私も訪問させていただきましたが、古民家を改造してオフィスを作ったIT企業もあり、その企業は東京の恵比寿に80名、神山町に20数名の社員を配置し、ITを活用して両者変わりなく仕事をしています。「神山町に住みたい」という希望のある社員に赴任してもらうわけです。町も、外から来た人達と地元住民とが協力して、まちづくりプロジェクトに取り組むことを推進する「神山町つなぐ公社」を設けて、外の人をうまく使おうという仕組みがしっかりと作られました。

また、大学が核になって自治体や商工会や NPO などとの相互作用により地域を強化するCOC(Center of Community)というプロジェクトを私が高等教育局長の時に始めさせていただいたのも、秋田での経験が生きたものと思っております。今、「生涯活躍のまちづくり」ー日本版CCRC(Continuing Care Retirement Community)として米国を参考にして導入しようとしています。高齢者の方に対してはアクティブ・シニアとして移住なども促しながら、「生涯活躍できるような町を創っていこう」という取組が行われています。秋田県内でも、秋田銀行や北都銀行などで検討され、CCRCの動きが始まっているようです。

いろいろなことを申し上げましたが、秋田にはやはり少子高齢化・人口減少といった課題があります。しかし、「それにどう取り組んでいくか」から生まれてくるもの、例えば高齢者のニーズに対応するような新しい産業のあり方などを切り拓いていくことができれば、それが産業の差別化になるわけですし、健康や環境など秋田の様々な蓄積を生かした展開ができるのではないかと思います。

そして、観光や食に関することなどで、まだまだ大きな資源にできるものがあります。そのためには、いろいろな視点、いろいろな力を生かしていくことが必要になると思います。必ずしも移住や定住だけではなく、いろいろな形で交流人口を増やすことを考えなければなりません。国際教養大学最初の卒業生である水野勇氣さんも県外から来て、秋田に住み地元バスケットボールチームの秋田ノーザンハピネッツを立ち上げました。水野さんの場合は、秋田に来てそのまま定住したパターンです。他にも秋田で就職をしていない人達がたくさんいるのですが、彼らが仕事の上でまた秋田を訪れ、地元とのつながりを作っていくことも期待できるわけです。そのような多様な広がりを持つ交流人口をどう増やしていけるかということが、これからの地方の活性化の大きな決め手ではないかと思います。

そして、産業を興していく際に多様な主体、官・民・学などの連携が必要になってきます。そのようないろいろな人達の連携を促していくコーディネーター役や、大きな流れを創っていく旗振り役が必要になってくるだろうと思います。このような人材の育成、特にレベルアップをしていくための継続的な育成が必要になってくると思われます。

最後に生涯学習に関してですが、そのような意味で人材育成がこれからの地域の活性化の本当の鍵になると思います。それも若い人達、いわゆる現役世代だけではなく、本当に社会全体の様々な分野は、多くの方々がそれぞれ「一億総活躍」で支えていくものであり、その意味で社会的な活躍というものは全員のものであると思っています。今日お集まりいただきました皆さまをはじめとして、お一人おひとりが「秋田の将来に何が必要か」を考えていただき、自らそのために必要な行動を起こしてい



くべきだと思います。秋田県の生涯学習が目指す人間像「^{こうどうびと}行動人」に関する資料を見ましたら、まさに私の言いたかったことが書いてありました。「行動人」という言葉は、「自分ができること」「自分がやるべきだと思うこと」のために、一歩でも前に踏み出す必要があることを表しています。先に、秋田の方がとても「人」の能力が高く素晴らしいと申し上げました。ただ一つの弱みは、前に出ること躊躇されることなんですね。遠慮されるんですね。ぜひ遠慮しないでいただき、外に対しても自信を持って向かっていただき、「行動人」としてこれからもご活躍いただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。